

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成十九年九月一日発行(毎月一回一日発行)  
第十四巻第五号(通巻第一六一号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第161号

9. 2007

ペーパーナイフ

品川 鈴子

夫に似て花野住まひに無位好み

碑をなぞる毛虫に「狂」の彫り深し

心療と老の棟なる花野の碑

下野しもつげの花野に紛る雨情の碑



観音にまぶしき西日忘れ帽

離宮の蛇に絵筆、写真機、句帖など

みんなの終章伸ばす門限に

浜木綿の蕾ペーパーナイフなり

帰省バス座せば忽ちねむ睡気けさす

看板はバイオ大学早稲の穂田



# 玉鈴吟

大阪 石橋 萬里

杜若客待ちの水みづ夫こ聖書読む  
親燕郵便局に通ひ詰め  
兄弟の手から手へ這ふ天道虫  
兜虫生まれ幼は早起きに  
刑場跡くの字に曲がり毛虫落つ

愛知 市川十二代

一葉の遺せし文や恋蚩  
卯の花の雨滴の光る飛驒路かな  
銀竜草一茶の墓の裏山に  
朴の花山路これより下り坂  
路を採る腰にくひ込む籠の紐

東京 市橋 章子

花石榴一日微熱をもてあます  
恋の鳩焰の色に頭を染めて  
紺足袋の小鉤止めかね祭の子  
黄心樹のことに匂へる日暮時  
左千夫忌の風青青と川渡る

愛媛 今井 忍

囀の枝に一句を吊し発つ  
垣覗き牡丹の黄を誉めてゆく  
藤見頃茶房のレジに教えらる  
紫雲英田が鋤かる園児の摘みし後  
万緑の奥宮神鶏長鳴きす

大阪 今谷 脩

大阪の暮し重ねて鱧の皮  
梅を干す典座教訓念ひつつ  
太陽に掌を上げて咲くアガパンサス  
血圧の正常にして秋立てり  
閑谷校閑か紅葉の楷大樹

香川 齋部 千里

耀声に身をひるがへし夏燕  
抱えきし刈草の中蛇の衣  
大師水引きて青田は日々に濃し  
草深きまま梅雨入りす兵の墓  
十葉の花が葉師の露座囲む

兵庫 浮田 胤子

夏夜あけ早鳥来てごみ荒す  
もくもくと鳥湧き出づ夏の朝  
夏の視界すべて鳥が埋めつくす  
小一時鳥は消えてしまひけり  
恐しき鳥の群は何処に住む

兵庫 馬越 幸子

毛虫一這ふ刑場跡の六地藏  
梅雨湿る屍口には灯点して  
巢燕も人も容れたる道の駅  
豌豆が採れば売るよ道の駅  
梅雨の川入るなど幼な武蔵の絵

大阪 大井 邦子

潮の香を押しやり匂ふ花みかん  
花みかん駅は匂ひのど真ん中  
田植機を洗ふそこより泥の水  
廃倉木舞に絡み薦青葉  
遊船の餌の在り処を知るカモメ

東京 大川富美子

身の丈のだいぶ縮みて更衣  
母のこと解る齡に白上布  
薫風や寺門開扉の鈍き音  
母衣を着ていくさ無き世の敦盛草  
藤棚を過ぎうつし世の風に触る

香川 大空 純子

楠若葉鎮座の神も歌いだす  
病窓の下は水盤燕子花  
淡泊な食事を終えて十薬臭  
豆飯の炊き立て混ぜし母の顔  
髭剃の音爽快に夏に入る

兵庫 岡 有志

八番線さつきの胴をぐるぐる巻き  
ビヤガーデン焼きの一串許されよ  
銭がふるふるてのひらを喜雨たく  
父の日の水中歩行百歩だけ  
バスの客宣伝団扇にて煽ぐ

埼玉 岡田 章子

映画館の座席に沈む喜雨休  
一筋の夏の横雲富士を切る  
ポンポンと莢より蚕豆はじき出す  
青葉風たわみ気になる書庫の棚  
移ろへる雲の影濃し若葉山

愛媛 岡野 峯代

ポケットを染めし桑の実この味わい  
真夜の雷病棟あげてうごめきぬ  
ゆらり見ゆ櫛の病葉くれないに  
念願のオクラ苗植え機嫌問う  
三味に枷かけて調子も浴衣会

# 薬草歳時記

(一六〇) ヘチマ(糸瓜)

市橋章子

糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな 正岡 子規  
痰一斗糸瓜の水も間に合はず       "       "  
をととひのへちまの水も取らざりき       "       "

糸瓜といえは、近代俳句の祖、正岡子規の忌、糸瓜忌を  
思わずにはいられない。

子規は、明治三十五年九月十八日、掲句を詠み、翌十九  
日午前一時に眠るように息を引き取った。十五夜の糸瓜水  
が咳、痰によいという言い伝えは『病林六尺』に子規自身  
が書いている。十九日は十七夜、十九日からの「をととひ」  
は十五夜にあたる。旦夕にせまっているであろう自己の死  
を客観的に見つめて、ユーモアさえ漂わせた辞世句に、心  
をゆさぶられる。

ヘチマは熱帯アジア原産のつる性の一年草。巻きひげで  
周囲のものに絡み付いて伸びる。茎の断面は五角形。夏か  
ら秋にかけて黄色の花をつけ、雌雄同株。雄花は小さい花

が集まって咲き、雌花は五〜十cmの大きい五弁の単独花。  
果実は円筒形で、六〇cmほどのものもあり、ぶらりとぶ  
らさがつている様子はなんともひょうきんであるが、ミネ  
ラルを多く含み、スープ、味噌汁、漬物、妙め物にして夏  
バテ予防によい。

痰きりには果実の煮汁と糸瓜水の煮詰めたものを服用す  
る。これらでうがいをするのもよい。

九〜十月頃、地上五〇cm位で茎を切り、地面側の切り口  
をびんに差し込んでおくと、一晚で約一リットルのヘチマ  
水がとれる。

糸瓜水にはサポニン、硝酸カリウムなどを含み、痰きり、  
利尿の目的に用いるほか、美肌効果もあり、化粧水に用い  
る。江戸時代、大奥の御用にこたえて、小石川御薬園では、  
一夏に約二百リットルのヘチマ水を採取して収めていた  
という。

名前の由来もユーモラス。中国名の糸瓜←いとうり←と  
うり↓「と」はいろは文字の「へ」と「ち」の間というこ  
とで、「へちま」になったという。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」三橋博監修北隆館

「薬草カラー大事典」伊澤一男 主婦の友社

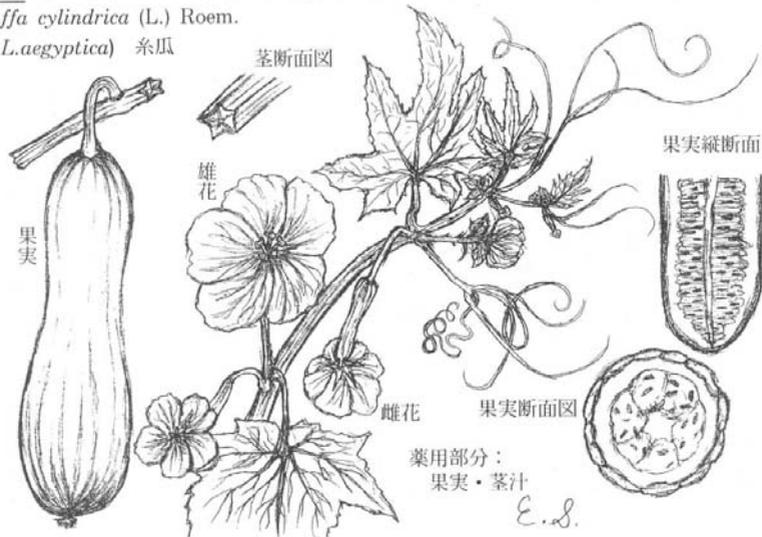
著者略歴 神戸薬科大学卒

ヘチマ (イトウリ・トウリ) [ヘチマ属] (うり科)

*Luffa cylindrica* (L.) Roem.

(=*L.aegyptica*) 糸瓜

須賀悦子画



堂守の植糸わすれたる糸瓜哉	与謝 蕪村
取りもせぬ糸瓜垂らして書屋かな	高濱 虚子
引き落とす糸瓜に思ふ我家欲し	石田 波郷
たまりたる糸瓜の水に月させり	山口 青邨
糸瓜垂れ青しといへど夕景色	長谷川 双魚
腹水みたび抜きて糸瓜忌近きかな	角川 源義
糸瓜忌の紅茶に消ゆる角砂糖	秋元 不死男
今日の空水の音して糸瓜垂れ	原 裕
糸瓜棚この世のこのよく見ゆる	田中 裕明
来る来ると言うて来ぬ人糸瓜垂る	北島 明子 (くろまけ)

# 鈴の奏

品川鈴子選

桜湯で婚のひと日の始まりぬ トロント 恩塚 典子

娘の婚六月の天晴れわたる

花嫁のベールを攫う夏の風

父と子のダンス見守る大牡丹

蚕豆の莢に戻らぬ遊学子 岡山 岡一敏恵

屍理屈は負けぬ末の子蕨餅

草の灰汁染む爪伸びて梅雨に入る

走り梅雨二度画き直す細き眉 大阪 吉田 和子

スコールに更紗の裾のもつれけり

日焼してジャワの祭りに紛れ込む

店先に裸子坐るバリ市場

花茨掻き傷残るハイキング

外国へ売らるる古船土用波 兵庫 伊勢ただし

若嫁の気配り上手立葵

大夕立隠す刑場供養塔

「禁塵捨」代官高札立葵

迅雷に試飲のグラス震えけり 兵庫 明石 文子

五月富士雲の流れを飽かず追ひ

一人ずつ緑に染まる樺林

老鶯の甘き声あり上り坂

午前二時まだ収まらぬ大南風 愛媛 濱田ヒチエ

カーナビの過信に迷う遍路宿

讃岐路は名物うどんに汗ばみて

青葉風一礼深く結願寺

今年竹自転車譲る誕生日 兵庫 中井 光子

吹奏楽流れる校舎大夕焼

若葉風誤嚥予防に舌体操

抑留記とともに棺閉づ榿落葉

葉桜や異国暮らしの子より文 兵庫 鈴木 愛子

バラ園に咲けり友好都市のバラ

捨ておきし盆梅実梅の二つ三つ

紗のコートゆるやかに召し婚の客

大空を右に左に凧駆ける 兵庫 伊藤 公女

祝凧一家で綱引き河原駆け

# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 秋田 直己 〃

\*選句は全て 品川鈴子

花嫁のベールを攫う夏の風

恩塚 典子

心地よい風が花嫁のベールを靡かせる。戯れの涼風がベールを欲しがっているようだ。それを見ながら母親は、美しい娘をベールごと連れて行かれる日なのだと改めて感じさせられる。喜びの中にも掌中の珠を奪われる心境。しかし、幸せの風に託すのだから寂しさよりも数倍の期待が膨らむ。

蚕豆の莢に戻らぬ遊学子

岡 敏恵

蚕豆は莢の内側に真綿のような白くて柔らかいクッションがある。それはさながら子を包む親の愛情のよう。莢から出て広い世間で学びたいと出て行った子を、親はいつ帰って来ても温かく迎えられるように元の形のまま莢を用意している。けれど、大きく育った子は元の莢にははまり切れないだろう。

スコールに更紗の裾のもつれけり

吉田 和子

リゾート地に欠かせないファッション、腰に一枚のおしゃれな布を巻きつけるパレオ。ジャワでは特産の更紗を巻いて開放的な気分浸っていたら、突然の夕立に見舞われて、せつかくのジャワ更紗がびしょ濡れ。裾が足にもつれて走りにくく、雨宿りもままならない。南洋ならではの気まぐれスコールも旅情のひとつ。

外国へ売らるる古船土用波

伊勢ただし

日本ではよく働いた船が古船として外国へ売られて行く。大切に使われて来た古船に白波が寄せている。外国での活躍を祈らずにはおられない。古船と季語の土用波の取り合せが絶妙です。

老鶯の甘き声あり上り坂

明石 文子

夏の鶯を老鶯と言ひ、夏になると繁殖のため平地より山地に移ります。よく鳴き、声も大きく美しくなります。山

道を歩いていると老鶯の美しい声が聞こえてくる。快い気持ちになりしばらく耳を傾ける。坂道も苦にならない。作者にとつて至福のひと時であろう。甘き声ありの中七がすばらしい。

カーナビの過信に迷ふ遍路宿

濱田ヒチエ

空海修行の遺跡である四国八十八箇所の霊場を巡拝すると一四〇〇キロに及ぶ。車で巡拝するのにカーナビがあれば大丈夫と出掛けてみると仲々目的の遍路宿が見つからない。あちこち道に迷って辿りついた時は日没であった。カーナビを過信したのが運のつき。然し、気を取り戻し最後まで計画を達成しようとする厚い信仰心に頭が下がります。

吹奏楽流れる校舎大夕焼

中井 光子

放課後クラブ活動で吹奏楽の練習を遅く迄続けている。作者は校舎から流れてくる吹奏楽を聞き乍ら、西の空が真赤になり黄金色を帯びる大夕焼を満喫しておられる。雄大な句である。

葉桜や異国暮らしの子より文

鈴木 愛子

花が散つて若葉が出はじめた頃、外国暮らしのお子様からエアメールが届く。文中には日本の桜のことや外国の景色等が記されている。お母様にはご自慢のお子様の違いありません。いつ迄もお幸せに！

大空を右に左に凧駆ける

伊藤 公女

凧揚げは江戸時代から広く行われ、もとは村々の年中行事として行われた。風の強い日でしょうか。大空の凧の様子を凧駆けると詠まれたのが見事です。

紫陽花の館に琴のコンサート

山口 博通

紫陽花に心を洗われた入場者が琴の演奏で更に幸な気分浸っている。勿論コンサートは大成成功だったに違いありません。紫陽花と琴の組み合わせが佳句となっている。(以下略)